

# 『赤い鳥』 鈴木三重吉童話作品における二人称代名詞

山田 実樹

## 1 問題の所在

鈴木（1973）は、現代日本語の対称詞の使用は「究極的には親族間の対話のパタンの拡張とみなすことができる」として、「目上（上位者）と目下（下位者）という対立概念」が対称詞の規則性を支えていることを見いだした。そして、話し手は、「自分より目上の人物」に対して二人称代名詞を使って呼びかけたり、直接に言及したりすることはできないが、「自分より目下の人物」には、二人称代名詞を使用できるとする。

しかし、国立国語研究所（1979）の調査では、二人称代名詞を用いて目上の者に言及できる方言があり、永田（2006）も、明治前期の散切物を対象とした調査によって、二人称代名詞が対称詞として、共通語より広く機能しており、目上の人物に対する対称詞として二人称代名詞が使用され、親族名や役割名、職業名は、現在の共通語ほど発達していなかったとする。

また永田（2008b）は、明治後期・大正期の小説、戯曲を対象とした調査において、徐々に二人称代名詞を目上の人物に対して用いる用法が薄れ、現代日本語の対称詞の用法に近づきつつあることを明らかにしている。すなわち、目上の人物に対して二人称代名詞を用いて言及することができない、現代日本語の共通語における対称詞の用法は、明治後期から定着し始めたと考えられる。

『赤い鳥』は大正 7/1918 年に創刊された、鈴木三重吉主宰の子供向け雑誌であり、童話作品を主として構成されている。雑誌の刊行期は、対称詞の用法が変化した時期と重なっており、この時期の二人称代名詞の使用状況を調査する際に適した資料である。

本稿では、対称詞の中でも特に二人称代名詞を取り上げる。二人称代名詞は対称詞の中でも最も基本的なものであり、時代と共にその用法が変化している。よって、まず二人称代名詞について調査することで、その用法の変化の一端を捉えることができ、それによって、『赤い鳥』の位置づけについても考察する手がかりを得ることができる。本稿では、二人称代名詞が『赤い鳥』の童話作品においてどのようなバリエーションを持ち、どのように使い分けられているかを明らかにすることを目的とする。その一端として、先行研究の整理を行い、『赤い鳥』の鈴木三重吉童話作品における二人称代名詞について現時点での調査結果を示し、今後の調査に繋げたい。

## 2 先行研究

対称詞全体の特徴については 1 節で簡単に触れたが、2 節では二人称代名詞の主なものについて形式ごとに取り上げ、整理して示す。

### 〈アナタ〉

小松（1996）は、アナタを、オマエサンと同様に、近世において最も敬意の高い二人称代名詞の一つであると述べ、房（2000）も江戸後期において待遇価値の高い形式であったとする。

小松（1996）はさらに、アナタについて以下のように述べている。

- ・後期江戸語では、アナタの方がオマエサン・オメエサンより待遇価値が高い。

- ・明治東京語の主流をなす対称詞はアナタ・キミ・オマエの3つであった。
- ・明治東京語において、アナタの使用者層は武家や上層町人から下層へと広がり、昭和になるとアナタを目上に対して使用しづらくなっていく。

房（2000）は、明治期の文芸作品を資料とした調査から、二人称代名詞の使用実態を話し手と聞き手の関係性に着目して、以下のように指摘する。

- ・上層に属する人物がアナタを使用する場合、目上にも目下にも使用している。しかし、明治前期において、女性が目下の相手にアナタを使用する例は少ない。
- ・上層の男性が使用するアナタは、明治後期になって待遇価値がやや低下した。上層の男性に比べて女性が使用するアナタの方が、待遇価値はやや高い。
- ・下層の男性がアナタを使用する場合は目上に対してであり、待遇価値の高いアナタが使用される。明治後期になるとアナタの使用は減少するが、それはオマエ系の形式の使用領域が広がったためと考えられる。
- ・下層の女性の場合、多くは目上への使用である。明治後期になると、下層の女性が使用するアナタには親しみが感じられるようになり、前期に比べて待遇価値が相対的に低くなっている。

また橋口（1998）は、『礼法要項』（1941）におけるアナタは「同輩に対しては、通常」用いる形式であり、「長上に対しては、身分に応じて相当の敬称」を用いるという記述を取り上げ、『中等学校作法要項解説』（1933）での「対称は通常「貴方」を使用すべき」という記述との比較から、1941年にはすでにアナタが敬意を持って使用されなくなっていたとする。

橋口（1998）は現代のアナタの用法にも言及しており、以下のように述べている。

- ・妻から夫に対して使用されるアナタは、敬意より親しさが表示されている。
- ・女性は男性よりも、家族や友人に対してアナタを多用し、アナタによって親しみや親切心を表している。
- ・子供が父に対してアナタを使用する時、そこには怒りが表示されている。
- ・消費者等、不特定の人を指して使用される場合には、アナタは親しさを表す。
- ・知らない人に対してアナタを使用する場合、その人物に対しての疑惑や不審な気持ちが表されることがある。

鈴木（1973）も、現代のアナタの用法について、一般にアナタはキミ、オマエ、キサマ等に比べて品の良い言葉と受け取られているにも関わらず、実際には目上に向かって使いにくいとし、目上の人に対して使える人称代名詞は存在しないことを指摘している。

### 〈オマエ〉

房（2000）は、

- ・女性の場合、明治前期では下層の人物が使用しており、妻から夫への使用もみられる。
- ・明治後期になると、使用者数は減っているが、使用者は中流まで拡大しており、妻から夫への使用はみられなくなる。
- ・男性の場合は、前後期共に使用者の階層は多様で、女性に比べて使用者数が多く、上層の男性も自分の妻に対してオマエ、オマイを使用している。

として、明治前期から後期にかけて、オマエの待遇価値は下がったと指摘する。

また永田（2008a）は、国定教科書における二人称代名詞の調査から、オマエは大正7年刊行の第三期以降、待遇価値が低下していることを明らかにしている。

### 〈オマエサン〉

小松（1996）、房（2000）は、オマエサンがアナタと共に近世において敬意の高い二人称代名詞の一つであったと指摘している。しかし、小松（1996）によれば、明治に入ってオマエサンは東京語の主流から外れた。

房（2000）は、明治期のオマエサンについて以下のように述べ、オマエサンの待遇価値が次第に低下したことを明らかにしている。

- ・前期では男女共に下層階級で使用されているが、後期になると男性より女性の使用が多くなる。
- ・男女共にアナタを使用する階層よりも、低い階層の人物が使用している。

また、オマエサンは話し手の積極的な意志・意図によって、「親しみ」の程度を調節するために使用されているとする。

### 〈キミ〉

キミは、江戸時代に武士同士の会話で使用され、明治以降に書生言葉を中心に広まったとされる。長崎（2007）は、明治期の小説を資料とした調査において、以下のことを明らかにしている。

- ・明治になるとキミは小説、雑誌、新聞等に多くみられるようになる。
- ・明治初期のキミは、武士や文人等、教養層が使用し、敬意を示す形式であった。
- ・明治期にはすでに男性が使用する形式として認識されていた<sup>1</sup>。

また飛田（1981）は、『当世書生気質』で書生たちがキミを使用し、目上にも目下にも対等にも使われる、上下に気を遣う必要の無い二人称代名詞であったとする。

さらに小松（1998）が、明治 20 年代以降、キミの使用が知識層や書生から、年少の男の子に広がっていったことを指摘している。

### 〈キサマ〉

辻村（1968）が、書簡や文芸作品等を資料として、キサマについて詳しく述べている。それによれば、貴様の変遷と用法は以下ようになる。

- ・『日本大文典』にすでに言及があり、古くは相応の敬意を持って、女性から男性に対しても使用されていた。
- ・当初書簡の中で使用された。その後口語に浸透すると同時に、急速に敬意が失われ、文語において天正頃には同等の人物に対する語となり、寛政期末には目下に対して使用された。
- ・口語として文学作品等に現れるのは江戸時代の中頃になってからであり、明治 20 年代になると現代の用法である卑罵語としての使用がみられるようになる。

### 〈ソチ、ソナタ〉

ソチは、『日本国語大辞典第二版』によれば、中世以降使用された語で、多く下位の相手に用い、主として武士・男性が用いた形式とされた。ソナタは、『日本国語大辞典第二版』によれば、その初出は鎌倉時代に編まれた『発心集』まで遡り、下位もしくは対等の相手に用いる形式である。待遇価値は、ソチの方が高い。

永田（2006、2008b、2009）は、ソチ・ソナタについて以下のように述べる。

- ・ソチ・ソナタ共に、『捷解新語』に用例がみられ、目下に対して使用されている。
- ・ソチは、江戸後期には、目下に対する対称詞として、専ら武家によって使用されており、散切

物でも主として士族や上層平民の男性が使用している。

- ・ソチ・ソナタ共に明治後期・大正期の小説や戯曲にはみられなくなる。

#### 〈テマエ〉

『日本国語大辞典第二版』では、テマエ・テメエは、対等あるいは目下に対して使用される語であり、後期江戸語では主に男性が下位の聞き手に対してぞんざいに使われた。その後テマエ・テメエは東京語にも受け継がれたが、待遇価値は落ち卑罵語として使われるようになったとされる。

永田（2006）は、散切物を資料とした調査において、テメエが卑罵語としても使われている点を指摘している。散切物ではテメエは、男性語として丁寧語を伴わずに使用され、士族による使用例もあるが、一般的には平民の使用が多く、くつろいだ場面での目下に対する対称詞となっている。

#### 〈オノレ〉

オノレは、『日本国語大辞典第二版』によれば、すでに『万葉集』において、目下に対して、または相手をののしってという形式として使用されている。

三輪（2000）は、「自己を主張する相手にたいして感情を害した話し手が、相手の自称詞を使って相手を直示する」際の罵りの感情を含む人称詞として、オノレを挙げている<sup>2</sup>。

以上の先行研究を踏まえて、以下に研究の方法と調査結果を示す。

### 3 研究の方法

調査は、『赤い鳥』前期（1918～1929）22巻のうち、奇数巻11巻分64冊における鈴木三重吉の童話56作品88話を対象として行った。表記と漢字のルビから語形を認定し、ルビ欠如等で語形が認定できない用例はみられなかった。収集した用例は、話し手、聞き手ごとに、上層・中層・下層のどの階層に属する人物か、それぞれの形式が常体と敬体のどちらと共に使用されているか、に着目し考察した。階層の分類は、「王」や「乞食」等の身分の他、文章中に表れる生活状況、挿絵等を手がかりとした。なお、動物や物等も童話というジャンルの特性上、擬人化されているため、人と同様に扱った。社会階層が形式選択の主要因となるかは定かではないが、登場人物が多様多様のため、目上・目下の関係のみで分類すると階層が様々で収集がつかなくなる恐れがあることから、本調査ではまず階層ごとに分類することとした。

### 4 調査結果

#### 4-1 全体の概要

調査の結果、555例の用例が得られた。形式は大きく以下の12形式に分けられる。アナタガタのように単数形に複数を表す接尾辞で構成されている形式は、単数形に含めた。

アナタ（-ガタ、-タチ）、アナタサマ

オマエ（-タチ）、オマイ、オマエサン（-タチ）、オマイサン

キミ（-タチ、-ラ、-ガタ）

キサマ（-タチ）、キカ

ソチ、ソナタ

テメエ、オノレ

上・中・下それぞれの階層に属する話し手の属性と、その内訳を示した表 1、形式ごとに話し手と聞き手の階層別に、その使用数を示した表 2、それぞれの形式が敬体・常体のどちらと共に使用されているかを示した表 3 をそれぞれ以下に示す<sup>3</sup>。表 2 の丸括弧の数値は、話し手における平均使用率を示している<sup>4</sup>。表 1 にあるように、階層の人数には偏りがあり、形式数を比較することはできない。しかし、会話においてどの二人称代名詞を使用するかは、話し手が自身からみて聞き手をどのように位置づけるかによって決まると考え、話し手一人あたりの形式使用数で階層間の比較を試みた。

表 1 各階層に属する話し手の属性とその内訳

階層			総人数	(人)	生物	その他)
上	神、天使、聖者、王族、天皇、士官、役人、お日様等	話し手	86	78	3	5
		聞き手	68	63	4	1
中	お婆さん、少女、猿・兎・野鼠等動物、もみの木、お菓子等	話し手	55	21	33	1
		聞き手	65	24	37	3
下	囚人、乞食、海賊、せむしの男、悪い大鼯・蛙等生物、貧乏な家の腰掛・手桶等	話し手	41	33	6	2
		聞き手	45	34	9	2

表 2 話し手・聞き手別用例数

話し手	聞き手			総計
	上	中	下	
アナタ				
上	48 (0.56)	13 (0.16)	21 (0.24)	82 (0.95)
中	5 (0.10)	32 (0.58)	4 (0.07)	41 (0.75)
下	14 (0.34)	7 (0.17)	12 (0.29)	33 (0.80)
アナタサマ				
上	3 (0.03)			3 (0.03)
中	2 (0.04)			2 (0.04)
オマエ				
上	87 (1.01)	28 (0.33)	36 (0.42)	151 (1.76)
中	10 (0.18)	40 (0.73)	8 (0.15)	58 (1.05)
下	30 (0.73)	5 (0.12)	24 (0.58)	59 (1.44)
オマイ				
上	1 (0.01)		2 (0.02)	3 (0.03)
中		1 (0.02)		1 (0.02)
下	2 (0.05)		9 (0.22)	11 (0.27)
オマエサン				
上	3 (0.03)	7 (0.08)	10 (0.12)	20 (0.23)
中		27 (0.49)	1 (0.02)	28 (0.51)
下		4 (0.10)	8 (0.20)	12 (0.29)
オマイサン				
上	2 (0.02)			2 (0.02)
下		2 (0.05)	1 (0.02)	3 (0.07)
キミ				
上		7 (0.08)		7 (0.08)
中		5 (0.09)		5 (0.09)
下	1 (0.02)			1 (0.02)
キサマ				
上	1 (0.01)		1 (0.01)	2 (0.02)
下	8 (0.20)	1 (0.02)	1 (0.02)	10 (0.24)
キカ				
上	6 (0.07)			6 (0.07)
ソチ				
上	7 (0.08)	4 (0.05)		11 (0.13)
ソナタ				
上	1 (0.01)			1 (0.01)
テメエ				
下	2 (0.05)			2 (0.05)
オノレ				
下	1 (0.02)			1 (0.02)
総計	234	183	138	555

表 3 形式ごとの敬体・常体別用例数

	1	3	5	7	9	11	13	15	17	19	21	総計	
アナタ	25	18	12	21	26	11	10	9	11	12	1	156	
敬体	25	18	12	20	26	10	7	9	11	7	1	146	
常体				1		1	3			5		10	
アナタサマ	1	1	3									5	
敬体	1	1	3									5	
オマエ	43	41	17	24	20	11	55	44	9		4	268	
敬体	2	2		1	1		4				1	11	
常体	41	39	17	23	19	11	51	44	9		3	257	
オマイ					3		1	3	6	1	1	15	
敬体												1	1
常体					3		1	3	6	1		14	
オマエサン	11	10	2	13	9	5	4		4	1	1	60	
敬体	10	9	1	4	3	1	1		1		1	31	
常体	1	1	1	9	6	4	3		3	1		29	
オマイサン					1					2		2	5
敬体					1							2	3
常体									2			2	2
キミ			11				1	1				13	
敬体							1					1	1
常体			11					1				12	
キサマ							1	7		4		12	
敬体								7		4		12	
常体							1					6	
キカ					6							6	
敬体					6							6	
ソチ		6	5									11	
敬体		6	5									11	
ソナタ			1									1	
敬体			1									1	
テメエ								2				2	
敬体								2				2	
オル										1		1	
敬体										1		1	
総計	80	76	51	58	65	27	72	66	32	19	9	555	

アナタは、上層から上層、中層から中層への使用が多いが、中層から上層や下層から上層へも比

較的よく使用されている。敬体での使用が全体の94%を占めており、敬意を持って同等または目上に対して使用する形式といえる。アナタサマは、上層と中層から上層の人物に対して使用されている。全ての用例が敬体と共に使用されていることから、敬意の高い形式であることがわかる。

オマエは、全形式中、最も使用数の多い形式である。上層から上層、中層から中層と同等での使用が多いが、下層から上層も同程度みられる。常体との使用も96%と非常に多い。オマイは、下層の話し手が多く使用している点に特徴がある。先行研究ではオマイはオマエと同様に扱われてしまっているが、鈴木三重吉はオマエとオマイを区別して使っているとも考えられる。

オマエサンは、中層から中層への使用が最も多い。中層・下層から上層への使用がない点も、特徴的である。またオマイサンは、上層・下層の話し手による用例がみられた。

キミは、上層から中層、中層から中層へと、自分より下位、または同等の人物に対して使用されている。敬体と共に使用されている例は1例のみで、常体との使用が多い点も、それを示している。下層から上層への使用が1例あるが、これは15-2「乞食の王子」の中で、乞食の格好をした王子に、水夫が王子と知らずに声をかける場面であり、話し手の解釈としては同等、もしくは自分より下位の人物に対して使用したといえる。

キサマは、上層の話し手の使用もみられるが、主に下層の話し手を使用している。全ての用例が常体と共に使用されている。

ソチ、ソナタは共に、上層の話し手が自分と同等、あるいは下位の聞き手に対して使用している。

テメエとオノレは、共に下層の話し手を使用し、相手をののしる場面で使用されている。

4-2より、用例を示しながら<sup>5</sup>、それぞれの形式について詳しくみていく。

## 4-2 形式ごとの用法

### 〈アナタ〉

- (1) 「あなたのご主人が、本当に、私の金の髪の王女を欲しいと仰るのなら、私も思ひ切つてさし上げませう。」(1-4「魔法の魚(下)」王さま→若い家来)
- (2) 「聖母さまよ、私はあなたに、せいーばいの愛をおさゝげまをしてをります。」(17-1「手づまつかひ」パールナビー→聖母マリア)
- (3) 「大さうお怒りになつて、出て行つてしまへと仰やるので、あなたにお分れをしにまゐつたのです。」(3-2「天の岩屋」須佐之男命→天照大御神)
- (4) 「あなたがニズニイから帰つて入らして、帽子をおぬぎになると、あなたの髪がすつかり真つ白な白髪になつてる夢を見たんです。」(13-5「ざんげ」イワンのおかみさん→イワン)

アナタの用例には、(1)のように上層の王様から下層の家来への使用や、(2)のように下層の手づま使いから上層の聖母マリアへの使用等、様々な階層での使用がみられた。その他(3)の弟から姉への使用のように、親族間で下位から上位への使用も若干みられた。また(4)のように、妻から夫へのアナタの使用も確認された。4-1でも述べたが、同等での使用が多いことは、鈴木(1973)の指摘する「品の良い言葉」とされているにも関わらず「実際には目上に向かって使いにくい」とする現代のアナタの用法に合致している。橋口(1998)が現代のアナタの用法として指摘する、(1)のような話し手から聞き手への親しみを表すアナタと解釈できる用例も多い。ただし、親族間での下位から上位への使用や、(2)のように下層から上層への使用もみられる。

### 〈アナタサマ〉

- (5) 「いや、私よりもあなた様は、人間の王さまのお姿よりも、その方がよっ程立派にお見えになりますよ。」(1-5「またぼあ」役人の一番の頭→王様)

アナタサマは、アナタより高い敬意を示す形式として使用されている。主に(5)のように上層・中層から上層に対して使用しているが、上層から上層への使用の場合、聞き手の方がより高位に位置し、基本的に話し手から見て聞き手が上位の場合に、この形式が使用されている。

### 〈オマエ〉

- (6) 「おれが命じなくても、おまへが先に立つてするのがあたりまへぢやないか。」(15-3「乞食の王子」エドワード王子→騎士ヘンドン)
- (7) 「一寸おまへの荷物を検査する。昨夜お前と一しよに泊つた商人が、喉を切られて死んでるんだ。」(13-5「ざんげ」巡査→大商人イワン)
- (8) 「必ず上手に逃げ出してくれ。もし、しくじつたら、お前もたゞではおかないぞ。」(1-1「ぶく／＼長々火の目小僧(上)」王さま→王女)
- (9) 「おや／＼、これは／＼。お前にまでそんなお手つだひをしてもらつて、本当にすまないね。」(11-3「こしかけと手桶」おぢいさん→牝牛)
- (10) 「おいヨケル、おまへの顔の飾りを見せてやれよ。」(15-5「乞食の王子」乞食→乞食のヨケル)
- (11) 「いとしきわが妻の女神よ。お前と一しよに作る国が、まだ出来上らないでゐる。」(3-1「女神の死」伊弉諾命→伊弉冉命)

オマエは、上層から上層への使用が多いが、その場合には(6)のように二人の関係性において、話し手が聞き手よりも高位であるという特徴がある。(7)では、巡査はイワンを人殺しの犯人として疑っており、横柄な態度でイワンに接している。このように話し手より聞き手の方が社会階層が高いと思われる場合でも、話し手が発話の時点で相手を自分より下位に位置づけている場合には、階層に関係なくオマエが使用される。この巡査は一緒に連れてきた兵隊たちにはキミを使用しており、ここからもオマエが待遇価値の低い形式であることがわかる。

その他、(8)や(9)のように父から娘への使用や、おぢいさんから牝牛への使用等、階層は同じでも、話し手からみて自分より下位に位置する聞き手に対して、親しみを持ってオマエが使用されている例がみられた。(10)のように、乞食等下層の話し手が使用するオマエには、乱暴さも感じられる。また(11)のように、夫から妻への使用がみられた。

このようにオマエは、基本的に階層が同じ場合でも、話し手より聞き手の方が目下の場合に使用されている。階層差がある場合には、罵りや蔑み等を伴ったネガティブな発話の場合が多い。永田(2008a)では、第三期の国定教科書からオマエの待遇価値が低下していることが指摘されており、本調査の結果もこれに外れるものではないだろう。

### 〈オマイ〉

- (12) 「おまいがさう言つてくれれば、おれももう怖れないけれど、下手をして、あいつにギュー／＼言はされて見ろ。」(9-2「巨人」フィン→フィンのおかみさん)
- (13) 「おまいは見かけによらない、りかうな子だからな。」(17-4「ろばのどん公」おぢいさん→ろ

## ばのどん公)

オマイは、(12) のような巨人や、乞食や海賊の手下等、主に下層の人物によって使用されている。(13) のように話し手から聞き手への親しみを表示していると思われるオマイの用例もみられ、基本的に話し手が聞き手を自分より下位に位置づけているという点で、オマエの使用に通じる。その他、オマイの使用は、教養の無さや非都市部に住む人物であることとも結びついている。これには、オマイの主な使用者が下層に属する人物であることも関係していると考えられる。

### 〈オマエサン〉

- (14) 「私も丁度、お前さんと同じやうに、為合せを探して歩いてみるのだから。」(1-1 「ぶく／＼長々火の目小僧 (上)」 王子→ぶく／＼)
- (15) 「お前さんもずゐぶん気がきかないね。」(7-3 「洗濯屋の驢馬」 猿→鯨)

オマエサンは、同等または目下の人物に対して使用され、オマエよりは丁寧でアナタよりもくだけた形式であり、親しみを表示する。(15) の「洗濯屋の驢馬」では、病気の主人のために猿の胆を取りに来た鯨と、それに気づいて (15) の発言によって上手く難を逃れた猿が罵り合う際には、オマエが使用されており、オマエとオマエサンの待遇価値に違いがあることがわかる。

### 〈オマイサン〉

- (16) 「ほら、おまいさんのお顔がにこ／＼わらつた。」(17-4 「ろばのどん公」 おぢいさん→小さな女の子)
- (17) 「おまいさんは、魔法で閉ぢこめられた王子だよ、お顔さん。」(21-5 「顔」 少年の心内語)

オマイサンはオマイよりも丁寧な形式として使用されている。(16) のおぢいさんは、一緒に商売をしながら生活している驢馬のどん公にはオマイを使用しているが、お客として品物を見に来た小さな女の子にはオマイサンを使用していることからそれがわかる。(17) の「顔」は西洋を舞台にした作品である。男の子は、家庭教師の先生が来るのを待っている間に空想をしながら、自身の顔に語りかけている。どこに住む、どんな少年かは描写されていないが、自分の顔に対して親しみを込めてオマイサンを使用している。

### 〈キミ〉

- (18) 「実は私のにらんだところでは、君方はつまり釣を口実にしてわれ／＼の行動を偵察にこられたものに相違ない。」(5-1 「間諜」 ドイツ軍士官→義勇兵・時計屋)
- (19) 「ときに君、一寸あすこへ這入らうぢやないか。」(5-1 「間諜」 義勇兵→時計屋)

キミは、男性のみが使用し、話し手からみて聞き手が下位あるいは同等の場合に使用されている。(18) では、フランス人の義勇兵と時計屋は釣りの途中で、敵であるドイツ軍に捕まってしまう。その際にドイツ軍士官が義勇兵達に対してキミを使用しており、上位から下位への使用である。また、(19) の義勇兵と時計屋は友達で釣り仲間であり、同等の間柄でキミが使用されている。

### 〈キサマ〉

- (20) 「これで、やつと、キサマだけはとりかへしたが、一たい、婆さんや、キサマのおふくろや、ナンやベツトたちはどこへ行つたんだ。」(15-4「乞食の王子」トムの父親→エドワード王子)  
(21) 「ピーター、一たいキサマは魔物かッ。」(19-3「ピーター・パン」ジェイムス→ピーター)

キサマは、全ての用例において、卑罵語として使用されていた。(20)の用例では、トムの父親の発話の後に、「ホップスは、たゞみかけて王子にがなりつけるのでした。」という地の文が続く。(21)の海賊の頭ジェイムスは、ウエンディを助けるために船に乗り込んできたピーターと戦いながら、感情を露わにして叫んでおり、共に相手を罵り怒りを表す形式として使用されている。辻村(1968)によれば、明治20年代になると現代の用法である卑罵語としての使用がみられるようになり、鈴木作品におけるキサマもこれに当てはまる。

### 〈キカ〉

- (22) 「官のいはれるには、貴下は国書の受けわたしについて全然誤解をしてお出でのやうである」(9-3「日本を (ペリー艦隊来航記)」ブッカナン→香山)

キカは、(22)のように、「日本を」という作品の中でのみ使用されており、高位の役人同士が公的な場で使用する特別な形式として、この作品で使われている。

### 〈ソチ、ソナタ〉

- (23) 「そちは何か心の中で思つてゐることはないか。」(5-3「鹿の群れ、猪の群れ」天皇→皇后)  
(24) 「そなたがいつまでも怒つたりしてゐるので、とう／＼みんながこゝまで出て来なければならなくなつた。」(5-1「難波のお宮」仁徳天皇→皇后)

ソチは、(23)のように、『古事記』を題材とした「日本歴史童話」の中で、神や天皇が使用しており、特定の人物が使用する形式となっている。上層から上層への使用の場合、聞き手の方が身分が低く、話し手からみて下位の人物に対して使用する形式といえる。

ソナタもソチと同様に、『古事記』に関する作品の中で、天皇が皇后に対して使用している。ただしこれは天皇が皇后に対して送った歌の一部であり、会話での使用ではない。

### 〈テメエ、オノレ〉

- (25) 「何だ？王子だ？王宮だ？ちきしやう奴、手めえ、気でもちがヤアがつたな。」(15-1「乞食の王子」トムの父→エドワード王子)  
(26) 「ちよッ、おのれがだましたな。くそッ。」(19-1「ピーター・パン」ジェイムス→ピーター)

テメエは二例とも(25)のように、トムの父親が使用している。(25)の用例において、トムの父は、エドワード王子を自分の息子のトムだと思ひ込み、「自分は王だ」と「気違い」な発言をするトムに怒り心頭であり、地の文にも「どなりながら、むりやりに引きずつて行きます。」とあることから、罵りと怒りを表す卑罵語として使用されているといえる。

オノレも(26)の一例のみだが、テメエと同様に卑罵語として使用されている。

## 5 まとめ

本稿での調査によって、主に以下の点が明らかになった。

- ・『赤い鳥』の鈴木三重吉童話作品における二人称代名詞の用法は、現代とほぼ変わらない。
- ・アナタにおいて、親族間を含む下位から上位への使用がみられる。

永田（2008b）は明治後期・大正期の東京語の対称詞について調査し、親族名称や役割名と共にアナタが親族間を含む目上に対しても使用されているが、明治前期に比べて待遇価値が低下し、現在の共通語の用法に近づきつつあることを指摘している。鈴木三重吉の童話作品における二人称代名詞の用法も、これに反するものではないと考えるが、さらに詳細に検討するには鈴木三重吉以外の作家の童話作品における二人称代名詞の用法についても調査する必要がある。今後さらに調査を進め、考察していきたい。

## 注

<sup>1</sup> この理由として長崎（2007）は、新聞や雑誌に掲載された女学生がキミを使用することを批判する記事や投書等を挙げている。

<sup>2</sup> 三輪（2000）は、話し手が持つ「相手の一人称代名詞に含まれる自己主張自尊への怒り、嫌悪ないしは揶揄の感情」によって、相手が使用する一人称代名詞が相手の属性となり、相手直示の効果を發揮して卑罵語となると述べる。

<sup>3</sup> 表3右上の数字は、巻数を表している。

<sup>4</sup> 話し手における平均使用率は、それぞれの階層の話し手の総人数を母数として求めている。従って、上層→上層へのアナタという形式の使用率は、上層に属する86人が48回使用したとみて求めている。

<sup>5</sup> 用例の後の丸括弧には（巻-号 「作品名」 話し手→聞き手）の情報を記している。

## 引用文献

国立国語研究所（1979）『各地方言親族語彙の言語社会学的研究（1）』秀英出版

小松寿雄（1996）「江戸東京語のアナタとオマエサン」『国語と国文学』73巻10号

小松寿雄（1998）「キミとボクー江戸東京語における対使用を中心にー」『国語研究論集』汲古書院

鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波書店

辻村敏樹（1968）「「貴様」の変遷」『敬語の史的的研究』東京堂出版

長崎靖子（2007）「人称代名詞「僕」「君」の変遷」『川村学園女子大学研究紀要』18巻3号

永田高志（2006）「明治前期東京語の対称詞ー散切物を通じて」『国語国文』75巻6号

永田高志（2008a）「国定国語教科書の対称詞」『国語と国文学』85巻3号

永田高志（2008b）「明治後期・大正期東京語の対称詞」『日本文化の鉱脈ー茫洋と閃光とー』風媒社

永田高志（2009）「捷解新語の対称詞」『日本近代語研究五』ひつじ書房

橋口美紀（1998）「二人称代名詞「あなた」の歴史的変遷について」鹿屋体育大学学術研究紀要

房極哲（2000）「明治期の二人称代名詞「アナタ」「オマヘサン」「オマヘ」ーその諸形と性差との関わりー」『日本語と日本文学』31巻

飛田良文（1981）「書生の敬語」『国文学』26巻2号

三輪正（2000）『人稱詞と敬語ー言語倫理的考察ー』人文書院

（広島大学大学院博士課程後期3年）